

◆【海員随想】二つの救命胴衣④ 石橋 正

急速な低気圧——奇跡的に1回で回り出してくれたエンジン。12時間に及ぶエンジンの酷使——今決断すべきは……

夕刻が迫る中で、私は2つの状況を考えた。このまま風浪に逆らってエンジンを回し続けければ故障が生ずるのは目に見えている。夜、遠い沖で、しかもこの荒天の中で横転沈没したら助かる者はいないだろう。逆に、まだ薄明かりが残っているうちに少しでも安全な海岸に自力座礁したらどうか。それなら全員が死ぬこともないだろう。

強航か自力座礁か、私は混乱していた。そして、誰にも相談することなく自力座礁することに決めたのである。ブリッジに集まっていた者にそのことを話し、待機中の乗組員にも全員救命胴衣を着け、大切なものだけを持ってブリッジに上がってくるよう伝達を頼んだ。そして、機関室にいる機関長と伝声管で話をした。

「機関長、自力座礁する。全員を上を上げてくれ」（機関長、君だけは残ってエンジンを回してくれ、という過酷な指示を含む命令でもあった……）

小さな船の動揺は激甚で、ついに煙突から大波を一発かぶってしまった。熱しきっている主機関の上に海水がなだれ込み、ジュウッと激しい音を立てて蒸発し、白煙が機関室に充満した。煙突にたまっていた煤も一気に落下し、機関部員は皆、真っ黒になった。そして、機関長の指示で機関の部署を離れ、皆ブリッジに上がってきた。真っ黒な煤だらけの顔をした連中が不安で震えている。

たしかに大揺れに揺られていて、ドーンと煙突から海水が入ってきたのでは恐ろしいのが当たり前。それにブリッジに来たら、見上げるような大波が連続で襲ってくるのだ。みんな何かにしがみついて前を見ていた。そして、大きい波がくると「来た、来た……」と、恐れおののくような小声でいって腰を引き、そーっと私の顔を見るのであった。

私は船長室に戻り、下着も靴下もすべて新しいものに着替え、制服を着た。暗いあかりの下で鏡に映った自分の顔を見たが、形相まことに陰しく、恐ろしくてすぐ目をそらした。次いで、隣の研究員室に飛び込んだが、船に弱いので定評のあるM技官は、ベッドに入って毛布の中から目だけ出して私の顔をじーっと見上げていた。

「Mさん、本船はもう駄目だから岸に乗り上げて人間だけ助けることにしました。貴重品を持ち、できるだけ厚着をして救命胴衣を着け、ブリッジに上がってきてください。そして座礁したら何か浮いているものにつかまって何とか逃げてください。今までのご協力を感謝します」。